恩林寺広報

No 120
令和四年（二〇二二）新年号
臨済宗建長寺派東光山恩林寺
電　話　〇二七六―八八―三九六四
ＦＡＸ　〇二七六―八八―四一二二
郵便番号　三七〇―〇六〇一

謹賀新年

明けましておめでとうございます。本年も檀信徒各家の平安を、心よりご祈念申し上げます。

恩林寺　閑栖
〃　住職
〃　責任役員
〃　〃
〃　〃
〃　檀徒総代
〃　〃
〃　〃
〃　〃
〃　奉讃会役員一同

新型コロナウイルス感染拡大防止のお願い

檀信徒各家におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は寺門興隆にご理解とご協力を賜わり、謹んで敬意を表します。また葬儀や法事、当山への来山時など、感染拡大防止へのご理解とご協力に対しましても、心より敬意を表します。引き続き予断を許さない状況下でございます。感染拡大防止へのご理解とご協力を、心よりお願い申し上げます。また諸行事等につきましても、今しばらく中止、縮小の方向を継続させて戴きますので、重ね重ねになりますが、ご理解ご協力を、よろしくお願い申し上げます。

ご協力よろしく
お願い致します。

建長僧堂師家法話

春は花　夏ほとゝぎす　秋は月
冬雪さえて　冷しかりけり

酒井泰玄

春は花夏ほとゝぎす秋は月
冬雪さえて冷しかりけり

永平寺ご開山道元禅師の「本来の面目」と題する和歌です。川端康成氏がノーベル文学賞を受賞された時「美しい日本の私」と題して記念講演をされました。話中この歌を引用し、弘く人口に膾炙しました。

道元禅師は、はじめ比叡山で仏法を学ばれ、後に宋代の中国へ渡り、約五年間諸方に研鑽を積まれました。帰国して次の様に述懐されました。

わしはそれ程多くの道場を遍歴して修行をしてきた訳ではない。
ただ、不可思議なるご縁に由り、はからずも先師天童如浄禅師にお目に掛った。
直ちに、眼は横に鼻は真っ直ぐついておる。
この真理がゾッコン腑に落ちた。
もはや、人の言説に惑わされることは無くなった。
かるが故に後生大事にかゝえておった重荷を下ろし、手ぶらで酒々落々と帰って参った次第。
このうえは天命に委ねてまいろう。
日々、太陽は西の空へ沈んでゆく。
風が雲を拂って、山嶺が現れ、
雨後の天は、あくまで高し。
詰まる処（やゝあって仰しゃるには）
四年に一遍、閏年に逢い、
鶏は、夜明けに刻を告げて啼く。
（意訳）

かように申されました。こうして山中に隠れ只管打坐を貫かれたのでした。

東日本大震災から十年。曽て「天災は忘れた頃にやってくる」と云はれましたが「忘れる前にやって来る」様になりました。

わたしたちは「自然法爾」の前に、敬虔ならざるを得ないと惟うのです。

合　掌

子育て ―― ほめて育てる

▼おせっかいは子を育てず

「ダメダメ危ない」。子育て中、つい口にしてしまうのがこの言葉。大人は、これまでの自分の経験からあれこれと先走り、子どもの身に危ないことが起きるのではないか、子どもが不安に陥るのではないかと口や手を出してしまいます。親切がすぎて不必要なまでに世話を焼くことを、老婆が孫を可愛がりすぎることにたとえ、非難の意味をこめて「老婆親切」＝「老婆心」といいます。ところが禅では、表向きでは非難しながらも、意味を反転させ、真心から出る深い愛情に溢れる言葉として「老婆心切」と、「親」の字を「心」に換えて表します。どんなときも非難せずにほめるのは、禅ならではの考え方です。

老婆心は一般でも、親切心が少しすぎたものとして好意的に捉えられることもあるようです。しかし「さわり三百」（触れたばかりで三百匁の損になることのたとえ）と昔の諺にもあるように、子どもがやろうとしていることに手や口を出しすぎると、せっかく芽生えた子どもの自立性や自主性を奪うことになってしまいます。おせっかいは子を育てず。いたずらに世話を焼き、老婆心からうろたえそうなときでも、「大丈夫、やらせてみよう」と一度深く深呼吸。ある程度のことは子どもを信じておおらかに見守りましょう。

精　進

▼怠ることなく精一杯生きる

龍にまつわる中国の古事に「禹門三級の波を、鯉が飛び越え、龍となる」という有名な話があります。

毎春、鯉が黄河上流の禹門にある三段の滝登りに挑戦しますが、ほとんどの鯉は登りきれません。しかし、何度も何度も挑戦して、その三段の流を全て登りきる鯉は、やがて龍に変じて、次は天を目指して登っていくと言います。これを禅では「困難を乗り越えて一心に精進を重ねれば、やがて龍のような素晴らしい悟りの境地にたどり着く」と解釈し、努力精進を推奨します。

若い経営者が、先代からの財産を湯水のごとく使い、ついには倒産してしまったという話はよく耳にします。こういう人は知識はあるのですが、智慧がなかったのです。

お釈迦様の智慧の宝庫『法句経』の百五十五番では「若き時、身を慎む行いを積まず、財を貯えざれば、彼は亡びゆくなり。餌のなき池を守り、老いゆく白鷺のごとくに」と、青年に警鐘を鳴らしておられます。若い時に、身も口も意も慎んで精進して生き、財産を大切にしないと、後に身を亡ぼすとの語りかけです。

さらに、二十一番では「精進は不死への道なり、怠りは死への道なり。精進するものは生き、怠りにふけるものは死せるひとし」と戒めておられます。お釈迦さまの人生観は精進の二字に尽きると言っても過言ではありません。

「精進」とは、ただ単に努力することだけではなく、常に諸行無常（全ての物事は移り変わること）の理を知って、今ここに怠けることなく、精一杯生きていくことの大切さを教えてくれる言葉でもあるのです。

●絵で見る禅の修行生活

雲水日記㉔

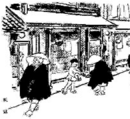
※雲水（うんすい）修行僧のこと。行雲流水のように淡々として一処に止住せず、正師を求めて遍歴する意よりくる。

托鉢（たくはつ）

街頭募金

一、六、三、八はまた托鉢の日でもある。「手で鉢をささげる」の義。僧堂では普通、分衛と呼んで三人一組となり、朝から十一時かぎりの掟で街頭を雁行する。まさに釈尊伝来の乞食行だ。貧乏してもコジキにはなりたくないという子供のころの夢とは裏はらに、はじめて「東福僧堂」と染め抜いた看板袋をかけさせられ、雨雪を問わず素足に草鞋がけ、「ホォー」「ホォー」と連呼しつつ、路地から路地を引きまわされて喜捨を求めて歩くことは、まだ生意気盛りの姿婆気が抵抗し、恥ずかしさいっぱいで満足な声は出ぬ。引手に叱られては吼えたてるが、彼らの流暢な追分調とはなんとほど遠い奇声であろう。

しかし、こうした間にも有難いもの、古参新米の区別なく一様に喜捨を受けていると、いつか心は大気のようにさわやかになり、卑下の心も増上慢も地に捨てて托鉢専一となる。施す者も受ける者も一面識なく名もわからぬ。ただ合掌。何のこだわりもなくやがて水の流れる心境になってゆく。



恩林寺ホームページ

恩林寺に関する情報が満載です。動画や写真をまじえ、過去の行事や出来事、案内事項など常に新しい情報を発信して居ります。是非ご覧になって見てください。

URL http://www.onrinji.net/